Japanese Association for Religious Studies

リック）以外に魂を救済する教えはないとし、また、信仰態度を隠匿から表明へと変化させた。これは来世における霊魂の救済を高めたキリシタンは表面的であっても、旦那寺へ帰依することは耐え難いことになり、来世において霊魂が救済されるならば現世において罰を受けたり、迫害されても隠匿せずに表明しようとしたためであった。浦上四番崩れにおいてキリシタンはこのように信仰内容と態度を変化させたのであった。

浦上四番崩れにおいて信仰態度を変化させたキリシタンであったが、急速な変化から信仰をめぐる問題も発生した。浦上村内では（カトリックに改宗した）キリシタンと非キリシタンとの間の確執が表面化した。それは親戚仇視や夫婦離絶、キリシタンでなければ村づきあいが出来なくなる、などの事態であった。また、寺請制度への拒否に始まった浦上四番崩れであったが、カトリック入信を改心し、旦那寺への復帰を願うキリシタンも現れた。このように信仰態度を変化させ、キリスト教（カトリック）以外の信仰を拒否したキリシタンが現れた一方で、急速な変化に抵抗を示したキリシタンも現れた。これは、それだけ浦上村のキリシタンの信仰が多様的であったことを示しているといえる。そして、それは禁制解除後にキリシタンが復活キリシタン（カトリック改宗者）とカクレキリシタン（はなれ）とに分派したことに対してもいえるのである。

ブラジル産ネオペンテコスタリズムの日本における展開

山田政信

キリスト教神学における、三位一体の第三位格である聖霊の働きが人々に救いをもたらすという信仰は、ペンテコスタリズムと総称される。ブラジルでは二十世紀初頭にアメリカから伝えられ、それまでドイツ系移民を中心とする民族宗教に留まっていたプロテスタンティズムを広くブラジルの民衆に開放させたという歴史を持つ。ポルトガル人による植民地化以来、ブラジルでは長らくカトリック教会が強い影響力を持っていた。しかし、一九九〇年代からはプロテスタンティズムの伸展という顕著な宗教変容が看守されるようになった。その要因のひとつにネオペンテコスタリズムが挙げられる。

ポール・フレストンはブラジルのペンテコスタリズムの特徴を時系列的に次の三つの波で区分する。アメリカ産のペンテコスタリズムが移植された一九一〇年代の第一の波、一九五〇年代にサンパウロで派生した第二の波、一九八〇年代の「失われた十年」にリオデジャネイロで生まれた第三の波。第一と第二の波の教団は布教方法に違いがあるが、いずれも個人の内心倫理を重視する。一方、第三の波の教団では悪魔祓いを重んじ個人の罪の意識は強調されない。また、追い払われるべき悪魔は民衆宗教として受容されているアフロブラジリアン宗教の神々である。このように、第三の波はそれまでの教団と教義レベル

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の断絶があるためネオペンテコスタリズムとして前の二つと区分される。

一九八〇年代半ば以降、ブラジルから日本へのデカセギ労働者が増加した。一九九〇年には入管法が改正されて労働者の人口移動が加速化し、現在では在日ブラジル人は三十万人を超えるとみられる。彼らの宗教活動を眺めると、一九九三年ごろから日本産ブラジル系プロテスタント教会を自主的に誕生させていることが特筆できる。それらのほとんどがデカセギで来日した一般信者や元牧師が小規模な活動を積み重ねることで創設に至っており、教団の特徴では第一と第二の波を踏襲している。一方、第三の波であるブラジル産ネオペンテコスタリズムは教団の組織力によって戦略的な規模の布教を展開させている。ここで注目するのがユニバーサル教会（Igreja Universal do Reino de Deus）である。

同教団は一九七七年にリオデジャネイロで活動を開始し、短期間でブラジルのペンテコスタリズムでは第三番目の大教団に成長した。教義、儀礼、財産の規模、政治参加、他宗教に対する戦闘的な態度、メディアの活発な活用など、従来のペンテコスタリズムの教団と非常に異なる特徴をもっている。日本では一九九五年に活動を開始。一九九六年にはタブロイド版の月間新聞（ポルトガル語と日本語）を発刊。希望者にはブラジルで放送されている教団番組の録画テープを無料で配布するなど、ブラジルからの投資をもとに組織的な布教を展開していることが伺える。現在、日本での拠点教会をJR浜松駅前の一等地に置き、国内に二〇カ所の教会を開いている。

ユニバーサル教会のブラジルでの主たる宣教方法はテレビ伝道である。同教団は一九八九年にブラジルで第五位のテレビネットワーク・ヘコルジを買収した。同社は日本に二つあるブラジル系衛星放送局の一つを買収し、日本でもブラジル同様の宣教番組を報道している。番組の内容は、日本の信者の証言と牧師によるインタビュー、ブラジルで作成された救済体験の再現ドラマ、というようにブラジルでの宣教方法に変わりはない。しかし、ブラジルと異なるのは、他宗教に対して批判的態度を取らないということだろう。番組では牧師が「私の教会では宗教に関係なく救いが得られる」というメッセージを発している。集会ではカトリック信者だという参加者もみられ、同教団が日本での新たな宣教方法を模索している状況が確認できる。

田中輝義の意識論

寺尾寿芳

本稿では仏教ことに『大乗起信論』をはじめとする大乗仏教の意識論に大きな影響を受け、教義以前のキリスト者の生存を独自に思索し、インカルチュレーションの新次元を模索したカトリック司祭田中輝義の思想を、ことに意識論に焦点を当てて概観したい。

田中輝義の思想はカルメル会士らしく、カルメル会改革派の神秘的霊性に強く影響されつつも、キリスト教信仰の日本における受容に関しては形式的な適用に留まらない、日本の風土文

NII-Electronic Library Service